

The Gallery voice NO-70

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 番地／TEL (098)888-6117 / 2023.11.17
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan www.galleryokinawa.com

— ♪ 流りゆる水 —

金城明一

私の現在地は目の前に七十路峠があり 振り返れば半世紀+20年の歳月が連なっている二十歳から絵を描き始めて50年 よくもまあ飽きもせずやって来たものだ 単純作業も苦にならない氣質がそうさせるのだろうか 若い頃から私の絵画姿勢は対象と向かい合っただけでキャッチボールして得られる類のものだ 風景も人物も静物も対話に似た手法で成り立っている 私が創り出すのではなく共同作業を積み重ねて立ち現れる画 創作というより共作と言えよう

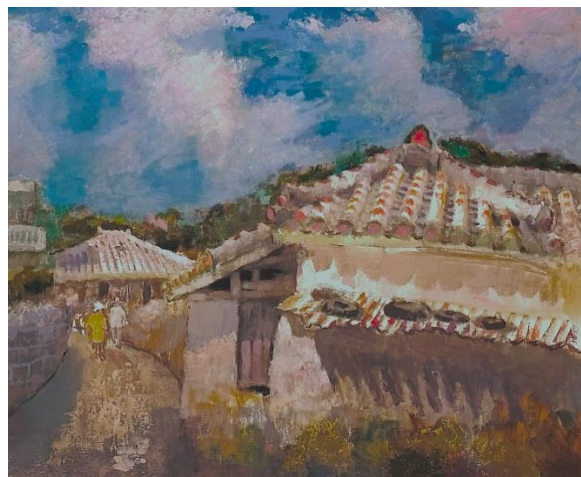
遥かに小学生の頃 同級生の中でサボテンを育てるのがブームになった 花のタネを蒔き温室らしきものを作ったりして朝に夕に世話していた 今庭にあるクルチの木は双葉の頃植え 紅い花を咲かせているサルズベリは隣家から一枝もらい挿し木したもの ガジマルは幼木を採って来て鉢仕立にした いずれも樹齢60年になろうとしている 木や石や土や草や 虫や鳥やと接して来た少年は自分の脳ミソより手の感触を信じたかったようで将来の仕事は肉体労働方面でネクタイ労働は無理だなと思ったものだ

そんな私が大阪の美術学校時代に出会った絵は これなら自分の流儀で取り組める世界だと目覚める思いがした 幼い頃から馴染んだ島の匂いや手触り 大地の凸と凹 折々の空気の感触 心持ちに肌持ち 地べたに親しんだ日々を・・・ 多分これらと繋がることで私なりの絵が出現するのではないかと

このところ 水彩と油彩の融合を目指して取り組み どうにかイメージに近づいて来た感がある 軽やかさと重厚さが混ざり合い あっさりだが味わい深く こってりと爽やかな とでも言うような・・・遅れ馳せながら今後は これまで先送りにしてきた気になる風物たちをま

とめて行こうかと思う ウチナー風景の描き手の最後のランナーの一人として私なりのウチナーの味わいを絵にしたい 画面に満ちるのは島渡る風であり 匂いであり乾きであり湿りであり 炎天でありそれらの混ざり具合であり 自ら十分に愉しみながら風景に溶けつつ たゆたい 納得の色価にたどり着きたい

人は時に運ばれ歳を重ねる 以前は背筋を伸ばし颯爽と闊歩していた人たちもこの頃はネグネグ ヨゲヨゲ ブーラーサッサイ 一上がり三下りの歩調 脚が腰が 眼が歯が シワが髪が 物忘れが・・・等々 お互いのポンコツぶりを披瀝し合う



「1012 ヘクトパスカルの屋」 (油彩・F30)

今回のタイトルの「流りゆる水」

♪流りゆる水に 桜花受きて 色美らさあてど 掬てんちやる・・・からの採用となった 有名無名の人たちが一人去り二人去りして 一つの間にか私の世代も老春の身 いつ不如意の日が来るかわからない 流れながれゆく時の中で人は何に出会うだろう 齢70を前にこれからの時間を想うこの頃 ”いつか” のために取っておいた計画たち のんびり屋の私もさすがに悠長なことは言ってもらえない 予定を前倒ししてしっかり向き合っていこう

♪波ぬ如寄してい 返ちまた寄してい 時や馬の走い 七十路前なちい

(画家/きんじょうめいいち)

— 消滅危機多々世 —

上原誠勇

アメリカ世～からヤマト世～なてい 10 年ぐる、うちなー美術界（1980 年代）やヤマトぬ美術団体んかい系列化が進ど～やび～たん。うぬ流りぬな～か美術家た～やモダニズム、抽象主義、幻想絵画あんしから、具象風土派、ポストモダン、ミニマリズム、アメリカンポップアートが流行と～いび～たん。うんな時、27. 8 才ぬ絵描ち金城明一やで～じな暴りそ～る野獣派ぬ絵描い。全く世間ぬ流りや団体んかい属さん独自走い。ヤマトぬ美術学校終わてい帰ていちやる頃、うちな～や国際海洋博後ぬ荒りと～る世ぬ中。島ぬ町屋～ぐわ～、断髪屋～、一般庶民ぬ生活風景画ありくり・・野獣派エネルギーが溢りてい、絵の具が画面から飛び出すん勢いぬ画風やいび～たん。

あの頃ぬ作品「糸満にて」（1982 年／油彩）が、現在、県立美術館「沖縄美術の流れ」（2023 年 7 月 14 日～2024 年 6 月 30 日）んじ展示中やび～ん。野獣派＝明一作品ぬ側んかい対照的なポップアート Tom.max（真喜志勉）作品が・・。ありから 40 年、画家金城明一ぬ作品世界やちゃ～なたがや～。

「はいさい！ちゅ～ん暑さいび～んや～さい！」畑うて草取りそ～る時 声かき～る 70 才半ぐれ～ぬウォーキングおじさん「うんじゅぬピーマン トマトやりきと～やびせ～」「あらんど～さい、むる草とう虫んかい喰あ～ってそ～物～無やびらん」「見～はなしね～むる草ぼ～ぼ～！」「畑さ～ん難じなむんやい～び～さや～さい とうあんせ～ちばみそ～りよ～」あん言ち おじさんこ～ぐ曲がいか～し歩っち去いたん。

まじ、現在ぬ金城明一さんぬ絵からうちな～口使いるウォーキングおじさん想び～出じゃちやび～ん。また 30 年ぐれ～前ぬ個展＝ハルサーのむら島尻を抜ける風＝ぬ作品群、ナ～ベ～ラ～畑うて働ちようる農夫婦ぬ姿ん印象深さん。うりからまた、海ん人ぬ素朴な暮らしがた、海ばんたぬ村ぬ風景。街がたぬ暮らしがた、町屋ぐわ～画家明一とう対象とうぬ距離感や「はいさい！」ぬかけ声が聞りてい心温くなゆん。

あんしが、今ぬ若た～や 道んじ会てん、知らんふ～な～ 顔ん見～ちん 目あ～さ～に頭うひぐわ～下ぎて通てい過いるあたいやん。また、畑すば道ぬウォーキング若に～せ～や、「はいさい！」わんから声～かきてん しらんふ～な～ スマホ手んかい さ～らない去いたん。

The Gallery Voice No-70.2023.11.17 画廊沖繩

ヤマト世なて 50 年過ぎね～ありや～くりや～むるうち変ていね～やびらん。ムラむらぬ共同体意識がいつ～薄くなてい、「な～はいばい」。言葉んむる日本標準語、挨拶はじめ、若者た～や わんがうちな～口し話し～ね～「何言てるの？ぜんぜん解らん・・？」「どこの国の言葉ね～？」ち言やび～ん あきさみよ～フリーズ状態！どう～ぬ在来言葉や＝消滅的危機状態自文化言語於日本世過 50 年＝状況 なていね～びらん。インターネットぬ発達そ～るデジタル世～、パソコンや W95, W7, W10, W11・・で～じハイスピード変化し ありんくりん世界と繋がてい色々便利など～しが、だー！「とう～ぬう～ま～ぬ～すん」時代なていね～びらん。明一絵画ぬ世界から、「わったーやうちな～んちゅど～」「島ぬ宝や忘りんなよ～」ぬ声が聞かり～んね～さび～ん。



「ガサミ獲り」 (油彩・F20)

くぬめ～島尻南部ぬドライブ、島ぬあまんくまん新屋ぬ団地が・・十数年前ぬ風景と様変わりそ～いびたん。角があたるコンクリー一家から、雨はじんね～らん四角～家、あんしからまた、屋根瓦んね～らん真っ黒～ぬ平屋。金城明一やうぬ時代ぬ急激ぬ変化かい敏感反応し、「島ん人ぬ暮し」、「島ぬ匂い」「島ぬ味」探げ～ち「島旅」そ～んねさび～ん。苔ぬセメント瓦、老赤瓦～屋根ぬムチ（漆喰）、「在来風景を看取るような気持」んりち・・画家や話し、油彩、水彩往還しキャンバス筆走らちよ～ん。明一絵画や 10 年 20 年後、ポストデジタル時代やちゃ～し映いがや～。（画廊主／うえはらせいゆう）

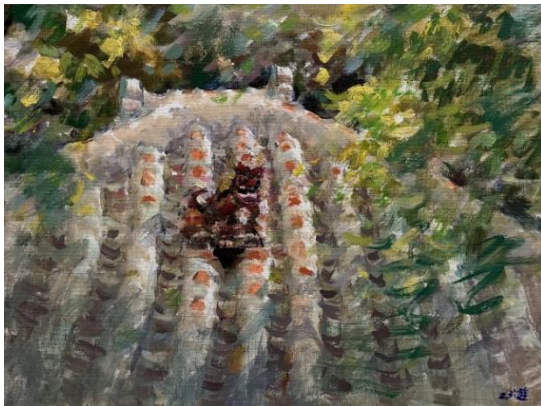
豊見山 愛

金城明一の描く絵画には、湿っぽい空気と蒸れるような暑さ、そしてそこに住む私たちの生命が、息づいているようだ。その絵の数々が並ぶギャラリーの壁には、昨日吹いた風のような懐かしい匂いと、明日降る雨を予感させるかのような、自然の機微が存在する。

私は38年前、ある家に飾られている、木炭で書かれた農師(ハルサー)の絵が好きであった。絵のオーナーから、それが金城明一という画家の絵と聞いて、何度か個展へも足を運んだ。ただただ、実直な画風と巧みな筆捌きに惹かれたのだ。

私が美術館学芸員の仕事をする日々の中で、再び《糸満にて》に出会ったことは奇遇であったが、厳しい収集審査の際には、「南島情緒でもなく、米軍基地でもない、私たちが日常を慎ましく送る日々の営みが、金城明一の作品には宿っている」と、専門家である収集委員の面々を前にして、臆することなく主張したことを覚えている。

ちょうど現在、沖縄県立美術館のコレクションギャラリーに、その作品は展示されている。つまり沖縄県の共有財産となっていて、永く純粋な色の作品に向き合えるのだ。私たちは、なんと幸せなことであろう。



「緑陰のシーサー」 (油彩・F6)

雨が降ると、畑に出られない。食べるものに事欠かない程度なら、雨も悪くはない。目を瞑り、雨に濡れた土の匂いを体いっぱい吸い込む。次第に晴れていくと、黄金の光が空から一筋の光を差し、次第に瞼を閉じていても熱く感じられるほどに、光の束が身体に降り注ぐ。金城の作品は、そのような沖縄の自然をたたえる、黄金(くがに)言葉ならぬ、黄金(くがに)ぬ表現と呼ぶに、相応しいと思う。



「にぎやかなスージ」 (水彩・F10)

古の琉球に憧れ渡航して来た、小杉未醒という画家のエッセイの一節を引用したい。

「旅ぬうちたち観ぬんどうしんてい観ぬんふしうがみくがにしやくとてい立ち別るすでいにちるちゆうしはらい…船のとむなじくとくとくとふなくいさみて眞帆ひきば、風やまともうまいひちぢん又んめぐりばぐいんとていまにく扇や三重ぐすく…」

心地して海涯孤島の安楽境へと帰り行く、上り口説に対して又同じ程の長さの是を下り口説という。唄に合わせて二人の少女が扇をかざして静かに舞ったそれを思い出して絵を習いに島から東京に来ている。若者に蛇皮線弾かして是を唄わしめて見た島の男でともかく吹弾の術を心得ぬは少ないこの若者もいい気持ちそうに唄っていたが、やがて彼の心の鏡に南海の波濤の色でも映ったか「琉球へ帰りたくなりました」といった。島人の懐郷の情は又特殊な哀調があるかと思う。鮫人の海を思う涙は滴滴珠玉を作すという話がある。

(——以上『太田洋資料新聞切り抜き』沖縄県立図書館(私製)2002年8月より引用)

油彩画を得意とする小杉が、次第に淡彩への関心を深めていく心意を、本展の金城の仕事に見る思いがした。沖縄の独特な表現を考える時、厚塗りの油彩画を想像してしまいがちであるが、スタイルを多様に超えていけるところが、美術の楽しさなのではないだろうか。

(キュレーター/とみやまめぐみ)



2023年10月 金城明一アトリエにて

金城 明一【きんじょうめいいち】

- 1954年 沖縄県東風平生まれ
 1973年 沖縄工業高校工芸科卒業
 1975年 中の島美術学校卒業（大阪）
- 【個展】
- 1981年 クラフト国吉ギャラリー（那覇）
 1982年 クラフト国吉ギャラリー（那覇）
 1985年 「ニーハオタイワン!! 肝騒的心」
 画廊沖縄（那覇）
 ギャラリー茶絵羅（那覇）
- 1986年 画廊沖縄（那覇）
 1987年 画廊沖縄（那覇）
 1988年 「ハルサーのむら島尻を抜ける風」
 画廊沖縄（那覇）
- 1989年 「マーヒラキーしてウチナーを見
 つめる画家」画廊沖縄（那覇）
 「人物画展」那覇市民ギャラリー
- 1991年 画廊沖縄(GALLERY WORK-II)
 1992年 画廊沖縄（那覇）
 1993年 「版画展」画廊沖縄(GALLERY
 WORK-II)
- 1994年 「水彩画展」画廊沖縄(GALLERY
 WORK-II)
- 1996年 「薄れゆくウチナーの味を求め続
 ける画家」画廊沖縄（那覇）
- 1997年 画廊沖縄（那覇）
 1999年 「島ぞうりで訪れた村の風景」
 画廊沖縄（那覇）
- 2000年 画廊沖縄（那覇）
 2007年 「うっぴ」画廊沖縄(南風原町)
 2009年 「太陽光光」那覇市民ギャラリー
 2010年 「夏を彩るものたち」サンパレス
 (那覇)

TheGallery Voice No-70.2023.11.17 画廊沖縄

- 2011年 「沖縄・水彩の日々」灸まん美術
 館(香川)
 2012年 「静物びけーん」ハコニワ（首里）
 2013年 「日々彩彩」ハコニワ（首里）
 2015年 「金城明一展」那覇市民ギャラリー
 2016年 「水彩の日々」那覇市民ギャラリー
 2017年 「油彩画展」那覇市民ギャラリー
 2018年 「島の陽と風を浴びながら」
 (画廊沖縄)
- 2021年 「風ちりていみぐる」（画廊沖縄）
 2023年 「流りゆる水」（画廊沖縄）
- 【グループ展】
- 1979年 ギャラリー中の島(大阪府民セン
 ター労働センター)
 1981年 川崎市民ギャラリー
 1982年 「第一回沖縄の現代絵画60人展」
 画廊沖縄企画（沖縄山形屋）
 「第二回沖縄の現代絵画60人
 展」画廊沖縄企画（沖縄山形屋/
 県民アートギャラリー）
- 1985年 「二人展」物産センター（沖縄）
 1988年 「二人展」那覇市民ギャラリー
 1993年 「プリントワーク13人展」画廊
 沖縄(那覇)
- 1995年 「ゆいまーる展」（長野）
 「沖縄戦後美術の流れ・シリーズ2」
 沖縄県主催／浦添市美術館
- 2008年 「手仕事の沖縄展」（横浜高島屋）
 2014年 「沖縄水彩画展」那覇市民ギャラリー



「花ん咲かち実ん入りみしより」（水彩・F20）

<絵画教室アトリエ遊 主宰>